

## 個人差に対応するためのオープンスペース活用

—— 小学校家庭科の場合 ——

赤崎 眞弓\* ・ 平松由美子\*\*

(平成2年2月28日受理)

### Practical Uses of 'Open Space' for an Individual Difference in Homemaking Education of Elementary School

Mayumi AKASAKI, Yumiko HIRAMATSU

(Received February 28, 1990)

#### 1. はじめに

小学校家庭科が最終的にめざしていることは、児童自身が家庭生活をよりよくしているという実践的な態度を身につけることである。そのためには、児童のそれぞれの家庭での生活を無視して授業することはできない。学習目標として、どの児童にも同じ知識や技能、態度を設定していても、個を大切にしながら学習を進めていかなければならない。そのためには、児童の個人差を十分に考慮しなければならない。

平成元年度に告示された学習指導要領では、「個を生かし教育の充実に努めること」や「児童の実態に応じ、個に応じた指導など、指導方法の工夫改善に努めること」が述べられている<sup>(1)</sup>。中学校家庭科では、個人差に対応するため、特に「被服」領域の実習において指導方法の改善工夫がなされ、実践例も数多くある。ところが、小学校家庭科においては、個人差がかなりみられるのに、それに対応したり、生かしたりする工夫が少ない。

そこで、小学校家庭科の授業にもっと個人差に対応した指導方法の改善をくわえ、さらに、個人差を生かしながら児童の能力を伸ばしていく方法のひとつとして、毎年小学校において増加しているオープンスペースの活用を提案したい。

#### 2. 家庭科における個人差

##### 2-1. 個人差のとらえ方

家庭科では、児童が日常生活をおくる上で必要な衣食住に関する内容を学習し、学習したことを家庭において児童が実践することをめざしている。

家庭科における個人差を表1のように4つの視点でとらえた。それぞれについて簡単な

---

\*長崎大学教育学部家庭科教育教室、\*\*長崎市立北大浦小学校

説明をくわえる。

表1 家庭科における個人差のとらえ方

(1) 環境が影響する個人差

児童それぞれの家庭生活のあり方は家庭科の学習に大きく影響を与えるので、個人差をとらえるときに忘れてはならない。家庭的背景をはじめ、ものの見方や考え方のような生活意識のとらえ方、生活経験や体験の有無のことである。

個人差をとらえる視点	個人差の種類
(1) 環境が影響する個人差	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 家庭的背景</li> <li>• 生活意識のとらえ方</li> <li>• 生活経験や体験の有無</li> </ul>
(2) 態度に影響する個人差	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 興味・関心</li> <li>• 学習意欲</li> </ul>
(3) 学習の進め方に影響する個人差	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 学習の進み具合</li> <li>• 学習速度の違い</li> <li>• 学習スタイルの違い</li> </ul>
(4) 学習のねらいに影響する個人差	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 達成目標の違い</li> <li>• 達成状況の違い</li> <li>• 学力の違い</li> </ul>

(2) 態度に影響する個人差

児童の学習課題や活動へ取り組む姿は、学習課題や活動のとらえ方の違いによりそれぞれ異なる。興味・関心、学習意欲についての個人差である。興味・関心があるかどうか、学習意欲があるのかどうか、という量の面と何に対するものかという質の両面をとらえなければならない。

(3) 学習の進め方に影響する個人差

家庭科では作業や実習を伴う学習が多く、学習課題を理解しているかどうか、作業や実習の手順や方法は決められたかどうか、ということは学習の進め方に現れてくる。ひとりひとりの学習の進み具合や学習速度の違い、学習スタイルの違いである。学習の進み具合とは、学習全体に対してどのくらい進んだかということであり、学習速度の違いとはある作業をするのに早くできたのか、それとも時間がかかったのかという違いである。

(4) 学習のねらいに影響する個人差

授業ではその時間あるいは領域や単元を通して、児童に身につけさせたいねらいがある。それは知識・理解や技能だけではなく、意欲や関心・態度も含まれる。このような学習のねらいをすべての児童に達成させなければならないが、その程度については個人差がある。できたかできなかったかという達成状況の違い、できばえがどうだったかという達成目標の違い、それから学習する知識を理解し技能を発揮できるかどうかという学力の違いをあげる。

以上、児童の学習状況として現れる個人差を4つに分類した。しかし、授業中ではこれらの個人差が組み合わせられて現れてくる。例えば、調理実習で2人の児童が野菜を切っているとしよう。ひとは切り方は速いが、雑である。もうひとは切り方はゆっくりであるが、きれいに切れている。これは学習速度の違いと達成状況の違いが組合わさって現れた児童の学習状況である。したがって、児童の学習状況を正確に分析し、慎重に吟味した上で、その児童の個人差であるのとらえなければならない。さらに、とらえた個人差はその時点のものであり、変化することを前提としてとらえなければならない。

それでは、家庭科において個人差はどのように現れ、どのようにそれに対応しているの  
 であろうか。茨城県下館市立下館小学校の研究報告書<sup>(2)</sup>から具体的に見てみたい。下館小  
 小学校では、ひとつの題材を通して、個人差のとらえ方とその対応を表2のように位置づけ、  
 すべての題材について個人差へ対応した年間指導計画を作成している。

個人差は各題材の学習前と学習中、題材末の個人の評価の3か所でとらえられている。  
 それによると、家庭科における個人差の現れ方は表3のように表わされ、次のような特徴  
 がみられる。

表2 個人差への対応

個人差への対応	
学習前	
学習前にとらえておくべき個人差	方法
学習中	
個人の実態をとらえるための手だて ○ 試行題材 ○ 練習題材	資料 学習形態 学習カード例 指導上の留意点
学習中にとらえておくべき個人差	方法
個人の知識・理解を高めるための手だて ○○○調べ 個人の技能を高めるための手だて ○ 個別題材 個人の意欲や興味・関心を高めるための手だて ○ 課題作り	
評価	
題材末の個人の評価	方法
学習後	
実践化 補充深化	手だてと方法

出典：茨城県下館市立下館小学校，

『「個人差に応じる学習指導」に関する調査研究報告書』，初等教育資料，No517，1988，p137

表3 個人差の現れ方の特徴

個人差をとらえる視点	学習過程	① 学 習 前	② 学 習 中	③ 評 価 時
(1)環境が影響する 個人差		<ul style="list-style-type: none"> <li>生活経験</li> <li>生活意識</li> <li>家庭的背景</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>生活意識</li> </ul>
(2)態度に影響する 個人差			<ul style="list-style-type: none"> <li>興味、関心</li> <li>学習意欲</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習意欲</li> </ul>
(3)学習の進め方に 影響する個人差			<ul style="list-style-type: none"> <li>学習速度</li> </ul>	
(4)学習のねらいに 影響する個人差		<ul style="list-style-type: none"> <li>既習の達成度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>達成度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>達成度</li> </ul>

## ① 学習前

ア. どの題材でも生活経験や生活意識、生活的背景（家庭背景）のいずれかが現れている。これらは環境が影響する個人差である。

イ. 前に学習した内容を発展させた題材の時は、既習の達成度に関する個人差が現れる。これは5年生に比べ、6年生で多く現れる。

## ② 学習中

ア. 授業のねらいがどれだけ達成されたかという達成度に関する個人差が必ず現れる。領域別にみると、「住居と家族」領域では、知識・理解に関することが多い。「食物」と「被服」領域では、知識・理解に関するだけでなく、技能に関することも多い。

イ. 製作や調理などの作業を行なうときは、学習速度に関する個人差が現れる。

ウ. 学習を進めるにあたっては、学習意欲や興味・関心の違いが取り組む態度に現れている。

## ③ 評価時

ア. 達成度、学習意欲、生活意識があげられる。

イ. 達成度は作品やペーパーテスト、観察等により、自己評価や他者評価も取り入れて評価する。

ウ. 学習意欲や生活意識は観察や学習ノート、反省文や感想文等により評価する。

エ. 学習後は家庭での実践を通して意欲づけを高める。家庭での実践は、カードやノートの記入により確認する。

## 2-2. 個を生かす学習活動の分類

家庭科において「個を生かす」ために学習活動を分類する。

「個を生かす」ための教育とは個別学習だけを指すのではなく、グループ学習や一斉学習などあらゆる学習形態のもとで考えられる。つまり、「一人ひとりの児童が自分の願いや目標を実現するために、自分の好みや方法や形態やペースで知識・技術を習得していくの

を援助する」<sup>(9)</sup> ための学習形態はいろいろある。

それぞれの学習活動の中心になる学習形態別に、学習活動とそれに対応する個人差、家庭科における題材の例を表4に示す。

表4 「個を生かす教育」の学習活動例

中心となる学習形態	対応する個人差	学習活動名	題材例	
			題材名	題材の展開
一斉学習	学力差 達成度	完全習得学習	「楽しい小物」 5年生	ぬいとり、ボタンつけ、布のぬい合わせなどについて、初めは全体で一斉に学習し、その後充分にできなかったところやうまくできなかったところを個別に練習し、完全な習得をめざす。
	興味・関心 学力差	発展課題学習	「便利なふくろ」 5年生	全員で共通の袋を製作することで、作り方の要領を学習する。その後、各自で大きさや形などを工夫した自分だけの袋を製作する。
グループ学習	学力差	習熟度別学習	「エプロンやカバー」 6年生	製作に関する基本事項については全体で一斉におさえる。製作するもののタイプが同じ子ども同士や製作過程が同じ子ども同士でグループを組み製作に取り組む。製作過程に応じたサンプルなどがあると指導しやすい。
	興味・関心 学習速度 学習スタイル	課題選択学習	「調理のくふう」 6年生	たまご、じゃがいもを用いた調理には、どんなものがあるのかをあげ、その中で子ども達が作れそうなものを選ぶ。作りたいものの違いによりグループを組み、計画をたてて実習に取り組む。実習後は各グループにより作り方などの紹介をして、情報の交流を計る。
ひとり学習	学習速度 達成度	自由進度学習	「エプロンやカバー」 6年生	製作にかかる時間は決まっているが、その過程における進め具合は、各自のペースなどにまかせる。製作過程に応じたサンプルなどがあると指導しやすく、遅れがちな子どもにも指導の重点をおく。早くできた子どもへは、共布で三角巾を作るなどの課題を出す。
	興味・関心 学習速度	順序選択学習	「着方とせんたく」 5年生	下着の着方、選び方およびせんたくに関して、どんなことを知りたい、調べたいと思っているかにより、学習課題をいくつか設定する。各自の興味・関心によりどの学習課題から取りかかってもよく、時間内に全ての学習課題ができるよう工夫する。教師は学習の手立てとなるような資料や教材をそろえる必要がある。
	興味・関心 生活経験	課題設定学習	「家庭生活のくふう」 6年生	家庭生活を楽しむものや、家族におくって喜ばれるものの条件を考え、各自どんなものを作るかを定める。作品は決まった時間内に完成できるものにする。製作は大半が個別に進められるだろうが、作品によってはグループを組んで進めてもよい。
	学習速度 学力差	無学年制学習		

### 3. オープンスペース活用の利点

学校生活全般を通して考えると、次の5つがオープンスペースを活用する利点としてあげられる。

#### (1) 学習形態の自由化

一斉学習、グループ学習、個別学習という学習形態にはそれぞれによいところがある。それぞれの長所を生かして学習形態を組み合わせることにより、学習が活性化される。

ところが、従来の普通教室では主に一斉授業が中心で、多様な学習形態を取り入れることは難しかった。それに比べて、オープンスペースでは、多様な学習形態で学習を展開することが可能で、グループ編成などが円滑に行なえる。さらに、さまざまなパターンの学習の場を用意することができるので、児童は活動内容やそのときの気持ちに応じて、学習の体勢を選ぶことができる。

#### (2) 学校独自の教育課程の編成

オープンスペースがあることにより、学習形態を自由に組み合わせることができ、各学校により創意工夫した教育活動を行うことができる。このことは、「個を生かす教育」からみると、個性化・個別化学習を展開する場が確保されていることになる。具体的には「はげみ学習」や週間プログラムという形でオープンスクールやオープンスペーススクールで実施されている。また、このような学習活動は教師が協力してティームティーチングの体勢をとるとき、より多様な展開をみせる。ティームティーチングにすぐにもとりかかることができる空間があるということはオープンスペースならではの利点である。

#### (3) 場の雰囲気作り

オープンスペースを設置する学校は、空間に連続性があり、児童の活動には広がりがある。空間に連続性があるということは、学校のあらゆるところが学習の場となりうる。従来のように教室だけが学習の場というわけではない。校内のあらゆるところが学習の場ということで、自然に学習意欲を喚起させるような雰囲気がでてくる。また、オープンスペースを有効に活用することで学習コーナーなどを作り、意欲的に学習に取り組ませることができる。

場の雰囲気づくりは学習の意欲づけだけではなく、給食の時間や休み時間などにもみられる。例えば給食の時間には、テーブルの配置をくふうしたり、飾りつけをして、学習机で食べる時とは違う楽しい食事の雰囲気をつくり出すことができる。さらに、休み時間や放課後は、教室と連続してゆったりとしたゆとりのあるスペースがあることで、リラックスした雰囲気で過ごすことができる。

#### (4) 交流の広がり

学習面や生活面などをみていくと、オープンスペースではいつも同じクラスや同じグループだけで行動するとは限らない。クラスの枠をはずして学年全体で学習したり、あるいは、無学年制学習ならば学校規模で学習が行なわれたりする。そのような中で多くのひとたちとふれあい、子ども同士、子どもと先生、先生同士というようにその交流の輪が広がり、学校全体が大きな集まりとなる。児童にとっては学校にきている子どもがみんな友だちであるし、先生も担任の先生だけでなく全員が自分の先生である。このこ

とは先生にとっても同じことがいえる。

生活面では、場の雰囲気作りで給食時間にテーブルの配置をくふうすることを述べたが、一緒に食べるメンバーを変えることにより多様な交流ができる。例えば、1年生と6年生がグループを組んで食べるとか、クラスはそのままだが先生たちが順番にクラスを訪問して一緒に食べるとかすることで、ふだん交流がない人とも話ができてよい。

また、みんなに見てもらえるスペースに作品を掲示したり、展示したりすることで違うクラスや学年の児童への刺激となる。さらに、掲示や展示をすることにより、会話をかわすきっかけとなり、交流が広がることも考えられる。

#### (5) 活動のゆとりや多様化

各教科については、学習形態の自由化や学校独自の教育課程の編成により、オープンスペースを活用した多様な活動ができる。しかし、多様な活動は各教科においてだけでなく、教科外の特別活動などにおいても可能である。

室内に広いスペースがあることにより、学年や全校での集会や実践活動が容易にできるようになる。委員会活動やクラブ活動はスペースのゆとりを十分に生かして活動することができる。また、学習発表会や合唱コンクールなどの行事を行う際も、従来の教室よりオープンスペースのほうがより工夫をこらした多様な活動が可能となる。

以上がオープンスペースを十分に活用した場合にあげられる利点である。活用しない場合はただ広いスペースがあるだけにすぎない。オープンスペースの機能を十分に生かせるように全校で取り組み、開発していきたいものである。

## 4. 家庭科におけるオープンスペースの活用

### 4-1. 家庭科における学習の場の活用

現在、家庭科において学習の場はどのように活用されているのだろうか。

ほとんどの学校に家庭科室は設置されているが、家庭科のすべての学習がそこでなされているわけではないし、設置されているとしても設備が整っていない場合もある。

そこで、家庭科における学習のうち実習を中心にした学習の場の使われ方を考えてみたい。

家庭科の学習場所としては、家庭科室や理科室などの特別教室、普通教室、屋外があげられる。普通教室で聴講を行い、特別教室で集中的に実習を行なう傾向がある。そこで実習についての学習場所を柳澤忠ほか共著の「教育内容からみた小学校特別教室の再編成の計画」<sup>(4)</sup>から、家庭科の領域別にみると図1のような結果がみられ、次のようにまとめられる。

#### ① 「食物」領域

「水」「火(ガス)」「調理台」を用いる調理実習は、設備の整った家庭科室で行われることが多い。しかし、家庭科室がなかったり、あっても被服主体の家庭科室である場合には、理科室を利用している。

#### ② 「被服」領域

手縫い実習では全般的に普通教室での実施が多い。特に家庭科室がない場合は、ほとんどが普通教室で実施している。また、家庭科室がある場合でも、その教室の設備関連が被服主体か、調理主体かにより利用率が異なる。被服主体の場合は7割が家庭科室を

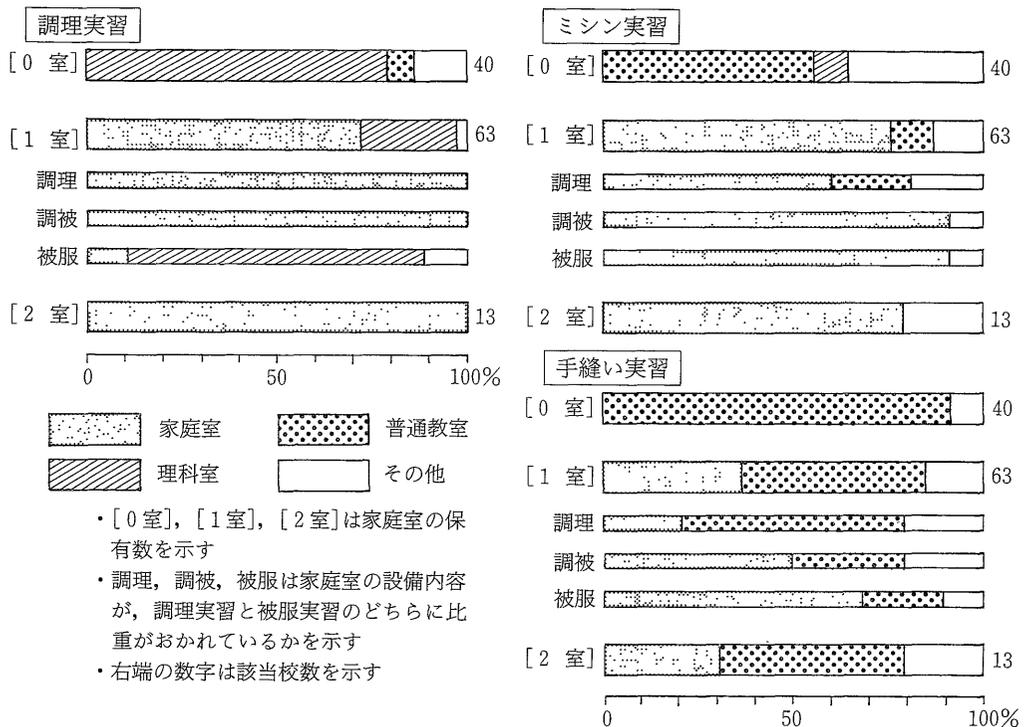


図1 家庭科室整備状況別の実習場所

出典 柳澤 忠・鈴木賢一・金丸宣弘・志水映子 共著  
「教育内容から見た小学校特別教室の再編成の計画」  
日本教育工学雑誌, Vol. 9 No 4,  
日本教育工学雑誌刊行会, 1986, p192

利用しているが、調理主体の場合は2割の利用にとどまっている。

ミシン実習では家庭科室がない場合、その半数は普通教室を利用している。しかし、家庭科室がある場合には、7割強が家庭科室を利用している。また、調理主体の場合でも家庭科室の利用は6割を越し、手縫い実習に比べて普通教室の利用は少ない。

### ③ その他

6年生の学習内容別に実習場所を調査している結果からは「ごはんのみそしるを作る」「簡単なしゅうをする」「エプロンやカバーを作る」などの題材で少数ではあるが、オープンスペースの利用がみられる。

以上のことより、家庭科における学習の場の活用のされ方として、次の3つがいえる。

#### (1) 学習活動の違いにより、学習場所も異なる。

教師の活動が主になる講義形式の時は普通教室で行い、児童の活動が主になる実習

は特別教室で行うことが多い。

- (2) 領域や単元により、学習場所も異なる。

「食物」領域の調理実習は特別教室で実施することが多い。「被服」領域ではミシン実習は特別教室で実施することが多いが、手縫い実習は普通教室で実施することが多い。

- (3) 家庭科室の有無およびその教室の設備関連が調理主体か被服主体かの違いにより、学習場所が異なる。

家庭科室がない場合、調理実習は理科室で、被服実習は普通教室で行っている。家庭科室がある場合、主体とする領域の実習については利用率が高いが、そうでない領域の実習についてはさほど高くない。特に、被服主体の家庭科室での調理実習における利用は1割程度であり、この場合8割近くが理科室で調理実習を行なっている。

#### 4-2. 学習活動と学習場所の関連

個人差に対応し、それを生かした家庭科を考えるにあたっては、家庭科における個人差のとらえ方を明らかにするだけでなく、学習活動にあった学習の場の活用のされ方も考える必要がある。

家庭科の学習場所としては、一般的には家庭科室が大半をしめていることはさきに述べた。ほとんどの学習が家庭科室でなされ、特別に用具や設備などを必要としない学習の時に普通教室が活用されている。そこで、本論文では、家庭科室、普通教室の2か所に、オープンスペースを加えた3か所を家庭科の学習場所として設定した。なお、オープンスペースを加えた理由としては次の3つをあげる。

- ①家庭科の学習のすべてが家庭科室で行なわれてはいないこと
  - ②今後、オープンスペースの増加が予想されること
  - ③オープンスペースでは、児童の個人差に対応し、それを生かした授業ができること
- さて、そこで家庭科の学習活動に適した場の活用のされ方が問題になる。それぞれの場

所の特性や持ち味を  
考えてそれらが生か  
されるように活用し  
なければならない。

家庭科を学習する  
にあたって考えられ  
る学習活動を分類し、  
その学習活動を効果  
的・機能的に進める  
ために適した場所を  
考えて、その関連を  
まとめたものが表5  
である。

オープンスペース  
の活用が望ましい学  
習活動として、次の

表5 家庭科の学習活動と学習場所の関連

学習活動 \ 学習場所	家庭科室	普通教室	オープンスペース
聴講する		○	
計画を立てる（予想する）		○	○
発表する（考える、作品）		○	
討論する（話し合う）		○	○
視聴覚教材を見る・聴く		○	
調べる	○		○
練習する	○		○
作る…調理する	○		
作る…製作する（被服）	○	○	○
試食する	○		○
まとめ（整理）をする		○	○

7つをあげる。

(1) 計画を立てる (予想する)

単元のはじめには、提起されたり、活動の中から生じた問題について予想を立てたり、これから先の学習計画を立てたりする。その場合、興味・関心や学習課題別にいくつかのグループに分かれて学習を進めることが考えられる。多くのグループに対応するためには、オープンスペースの活用が望ましい。

(2) 討論する (話し合う)

討論会や話し合いを学級全体でする場合は、普通教室でする方がよい。それはスペースが広すぎると発表者の声全体に行き届かなかったり、学習に参加しない児童がでてくるおそれがあるからである。しかし、グループ別で話し合う場合にはオープンスペースを活用する方が隣のグループのことを気にせずに話し合えたりする。

(3) 調べる

何かを調べるのに用具や設備が必要となる場合には、家庭科室を活用するほうがよい。しかし、意識調査や本、資料などにより調べていくときは、特別に用具などを必要としないので家庭科室でなくてもよい。このような場合はオープンスペースを活用すると大きなテーブルを使ったりしてグループや個人別に広く活動がなされる。

(4) 練習する, (5) 製作する

どんなことを練習し、どんなものを製作するのか。また、そのためにはどんな道具が必要なのかにより、学習場所が異なってくる。例えば、包丁の使い方の練習やミシン縫いの練習、ミシンを使ってエプロンを製作する場合などは、家庭科室を活用することが望ましい。しかし、特別に用具などを必要としない作業、例えばボタンの付け方やなみ縫いの練習は普通教室やオープンスペースでも学習できる。また、作業をとまなう学習の時は、学習速度の違いや達成状況の違いなどにより個人差もあらわれやすい。そこで、学習速度や達成目標がにかよっている児童どうしをグループにしたり、あるいはその中にレベルが高い児童を入れて学習の活性化をはかったりする。この場合は一斉学習よりもグループや個別学習となり、多くのグループの形成が予想される。このことから、より効果的に学習を進めるにはオープンスペースの活用が望ましい。

(6) 試食する

調理実習はそれまで調理をしていた家庭科室で行なうのがほとんどである。そのときには、たとえば、先ほどまで調理に使用した鍋や調理器具、あるいは野菜くずなどがすぐ目につく場所にある。学校によっては調理台と試食テーブルが別々になっているところもあり、より家庭に近い状態にあるといえる。家庭科室とオープンスペースが近接しているならば、特に試食の時にオープンスペースを利用したい。調理台からオープンスペースまで移動するのにいくらか距離があるが、テーブルまで食事を運ぶことも学習のうちである。試食するまでにどんなことに気を配らなければならないのかについても学習できる。

また会食の学習では、会食をする場所としてオープンスペースを活用することが望ましい。会食の目的として、級友や先生たちと話をして楽しい時間を過ごすことがあげられよう。そのために部屋やテーブルをきれいに飾り、楽しい気分で会食が出来るようにところがける。その場合、家庭科室では前述のように近くに調理台があり、そ

の存在が会食中も気になる。また、普通教室ではふだん学習している部屋なので家庭でいうならば勉強部屋で食事をするという感じである。これらに対して、オープンスペースはそこで学習もするが、読書をしたり、友だちとおしゃべりをしたりというくつろぎの場としても活用されている。大きなテーブルもあり、会場の設営もやりやすく、食事をするには普通教室よりもオープンスペースのほうが適している。

#### (7) まとめ（整理）をする

単元ごとのまとめをするときなどには、家庭科室で行うような作業は終わっている。そのためまとめは普通教室でなされるが、効果的に進めるにはオープンスペースのほうがよい。たとえば、その単元を学習する際に使った教材や資料を段階別にテーブルに置いたり壁に張ったりして、それらの教材や資料をもとにまとめることができる。全員が同じ形式でまとめるならば普通教室でやってもよいが、自分なりの形式やポイントを持ってまとめる場合は、オープンスペースを活用したほうが全員の児童に対応できる。

### 4-3. 個人差に対応するためのオープンスペースの活用

ここでは具体的にどのような題材でどのような活用の仕方ができるのか、4-2 であげた7つの学習活動別に考え、表6のようにまとめた。なお、ここで取り上げた題材は、現行の学習指導要領にしたがい編成された教科書（開隆堂）より取り出したものである。

### 4-4. 個人差に対応するためのオープンスペースの活用した題材例

児童の個人差に対応し、それを生かすような学習活動別の題材について、オープンスペースを活用した題材例を次にあげる。

#### 題材例①「調理のくふう」……学習活動「計画を立てる（予想する）」

題 材；「調理のくふう」

対 象；現行……6 学年，新課程……5 学年

学習内容；「たまご料理の計画」

学習時間；1 時間

学習目標；たまごを用いた簡単な調理例をあげることができるとともに、各自が選んだ調理例について調理の計画を立てることができる。

観 点；たまご料理としてあげた調理例の中から作って食べたいと思うものによってグループを組む。オープンスペース内で各グループに分かれ、材料や作り方など実習の計画を立て画用紙にまとめる。

#### 題材例②「計画的な家庭生活」……学習活動「討論する（話し合う）」

題 材；「計画的な家庭生活」

対 象；現行……6 学年，新課程……6 学年

学習内容；「生活時間の使い方のくふう」

学習時間；1 時間

学習目標；グループでの話し合いに積極的に参加し、各自が生活時間の使い方の改善点をみいだすことができる。

観 点；事前の調査により、家庭形態が異なる児童が集まるようにグループを

表6 学習活動と小学校家庭科の題材

題 材		学習活動	計画を立てる (予想する)	討 論 (話し合う) する	調 べ る	練 習 す る	製 作 す る	試 食 す る	まとめ(整理)をする
5 年 生	わたしたちと家庭			○	○				
	楽しい小物					●	●		
	生野菜の調理			○	○				○
	着方とせんたく			○	●				○
	便利なふくろ	○					○		
	ゆでたまご								
	野菜の油いため				○				○
	気持ちよい住まい			○	○				○
	わたしたちのおやつ			○				○	
ミシンぬい	○		○						
6 年 生	計画的な家庭生活			●	○	○			
	エプロンやカバー	○				○	●		
	日常の食事			○	○				
	日常の衣服			○	○				○
	調理のくふう	●							○
	健康な住まい			○	○				●
	楽しい会食	○		○				●	
家庭生活のくふう	○					○			

○…題材と学習活動の関連よりオープンスペースの活用が望ましい

●…部分的にオープンスペースを活用

組む。オープンスペース内で少し間隔をおいてグループごとに座って、話し合うことにより、各家庭の生活時間の使い方を知るとともに、各自の改善点がみいだせるようにする。

題材例③「着方とせんたく」……学習活動「調べる」

題 材；「着方とせんたく」

対 象；現行……5学年，新課程……6学年

学習内容；「せんたくに関する調べ学習」

学習時間；2時間

学習目標；各自の興味・関心や学習ペースにしたがい、下着のせんとくに必要な洗剤・用具・洗い方などについて調べていくことができる。

観 点；児童の興味・関心，学習スタイルなどにより学習課題を設定する。それぞれの学習課題に応じ，オープンスペースに学習コーナーを設け，各コーナーを回りながら学習を進める。

題材例④「楽しい小物」……学習活動「練習する」

題 材；「楽しい小物」

対 象；現行……5学年，新課程……5学年

学習内容；「ボタンつけ，ぬい方の練習」

学習時間；2時間

学習目標；ボタンつけや手縫いによるなみ縫い，返し縫い，玉結び，玉どめができる。

観 点；ボタンのつけかた，なみ縫いや返し縫いの仕方について全体で学習し，教師の師範のあと，オープンスペース内の好きなところでそれぞれに練習する。サンプルを準備し，テーブルに置き，児童のつまずきを解決する手だてとする。技能を習得した児童のためには学習内容を生かせるような次の教材を準備しておく。

題材例⑤「エプロンやカバー」……学習活動「製作する」

題 材；「エプロンやカバー」

対 象；現行……6学年，新課程……6学年

学習内容；「エプロン製作」

学習時間；8時間

学習目標；計画的に製作に進め，目的に応じた縫い方でエプロンを作り上げることができる。

観 点；それぞれで製作の計画を立て，各自のペースにあわせて製作を進める。オープンスペース内のテーブルの上にサンプルを置くなどして，進度のばらつきに対応する。また，デザインが同じ児童同士グループを組ませて指導しやすくする。オープンスペースの床は型紙作りや布への印つけ，裁断などの時に活用する。

題材例⑥「楽しい会食」……学習活動「試食する」

題 材；「楽しい会食」

対 象；現行……6学年，新課程……6学年

学習内容；「会食を楽しむ」

学習時間；2時間

学習目標；各自が選んだ役割をしっかりと果たすことができるとともに，全員が楽しく会食をすることができる。

観 点；2クラス合同の会食をゆったりとしたスペースでできるように会食の場所をオープンスペースとする。グループの中で、興味・関心や何が得意かにより、食事を作るか、会場作りをするかを選び、作業は同時進行で進める。なお、計画の時点では、グループ全員で食事作り、会場作りの両方について考える。

題材例⑦「健康なすまい」……学習活動「まとめ（整理）をする」

題 材；「健康なすまい」

対 象；現行……6学年，新課程……6学年

学習内容；「気持ちのよい，健康なすまい方のくふう」

学習時間；1時間

学習目標；気持ちのよい，健康なすまい方をするために，わたしたちができるくふうをあげることができる。その中で，特に関心があることについては詳しくまとめる。

観 点；これまでの学習のまとめをするとともに，特に関心があるテーマについては個別に詳しくまとめる。その際，オープンスペース内の壁（間仕切り）やテーブルを使って，これまでの学習に使ったグラフや表などの教材を活用して，まとめの手だてとする。

## 5. まとめ

家庭生活をよりよくしていこうという実践的な態度を身につけるためには，児童の個人差を十分に考慮しなければならない。家庭科の授業においては，児童の個人差のとらえ方がはっきりしておらず，児童の個人差もかなりみられるのに，それらに対応したり，生かしたりする工夫が少ない。

本論文では，小学校家庭科における個人差のとらえ方，個人差への対応などをあきらかにした。さらに，児童の個人差に対応するための学習活動の場を普通教室と家庭科室だけとせずに，近年増加の傾向にあるオープンスペースをも学習活動の場と考えることを提案し，そのための題材例を提示した。学習の場を広げることによって，新たな可能性がみいだせる。

## 引用文献

- (1) 文部省，「小学校学習指導要領」，第1章総則，1989
- (2) 茨城県下館市立下館小学校，「個人差に応じる学習指導」に関する調査研究報告書」，初等教育資料，No. 517，1988，p311～p365  
 （注釈）下館小学校は文部省が実施した「個人差に応じた学習指導に関する調査研究」の小学校家庭科の研究協力校である。昭和60年から3年間授業研究を中心とした実践研究を行ってきた。
- (3) 水越敏行著，「個を生かす教育」，明治図書，1985，p48
- (4) 柳澤忠ほか著，「教育内容からみた小学校特別教室の再編成の計画」，日本教育工学雑誌，1986，p192